民俗学

８・５　はこぶアンケート抄—Q.私の通学体験—

Facebook「とある民俗学講師の補足メモ」

・移動のための技術と戦略／移動がもたらす空間と社会の発見／移動が生み出すアクティビティと人間関係

［徒歩（町）］兵庫県西宮市の高校に通っていたのですが、通学途中にカーテンがかかっている工事現場から殺すぞという言葉が聞こえてきて発砲音らしい音を聞きました。気になってその工事現場の近くで待っていたら、中から５厘刈りの坊主５人と黒い革ジャンをきたヤクザみたいな人が出てきてアルファードに乗っていきました。とてもこわかったです。

［徒歩（海）］小学４年まで静岡県熱海市住んでいて、下多賀から 4.2 キロ離れた網代という海に近い小学校に片道１時間以上歩いて通っていました。その途中の歩道では、干物屋さんが干物を干したり、漁師さんがワカメを乾燥させたり。波が高い時は海水が飛んで来ることも。海に近い小さい街だからこその思い出です。

［徒歩（山）］小、中学生の頃、通学中にサル、シカと遭遇しました。京都市西京区桂坂(京大桂キャンパスのあるところ)に住んでいるのですが、山を切り開き自然と一体化された町をコンセプトに作られた住宅街なので、学校の裏山からシカや、サルがよく降りて来て、電柱や電線で団欒していることがよくありました。校内放送で、シカがいるので帰らないでくださいなどと、よく流れていたものです。

［近道］熊本市南区のそこそこの田舎の小学校に通っていた。その通学路は、小学生の足では 30 分ほどかかる上、線路を超えるための角度が大きい坂のような高架橋があり、毎日歩いて行くのが大変だった。しかし、通学路にはなっていないが、高架橋を通らずに踏切を通る道もあった。この道は、小学生には危険という理由で禁止されていたが、そっちの方が楽であることを皆理解していたため、そちらを通る人もいた。対して、小学生特有の正義感から、それを大きな声で注意する人もいた。なお、私は後者だった。

［雪］冬場は自転車で雪道を通学していた。朝の雪は下に氷が隠れていることが多くて特に滑りやすく、数え切れないくらい転んだ。最初は制服を引っ掛けたり、腕をしたたかに打ちつけたりと、散々だったが、だんだん転んだ時に受け身を取れるようになり、大きな怪我をしなくなった。三年時には、転んでから 15 秒くらいで乗り直すことができるようになっていた。雪が降る地域だからこその通学体験だと思う（長野市）。

［自転車］高校は、岡山市の中心部で自転車通学していました。最初は行きたい道を行きたいように行けるのが楽しくて、まるで冒険するかのようにワクワクしながら、路地に入ったり商店街を通ったり、いろいろな道を開拓していましたが、慣れていくうちに飽きて、いつのまにか最短かつ最もアップダウンの少ない道を発見し、ずっとそこを無表情で通るようになってしまいました。仕方がないことですが、楽しむ心を忘れた嘆かわしい変化だったかも、と思います。

［バス］愛媛県宇和島市津島町は田舎だったので、小学校はスクールバスで 15 分のところにありました。沿岸部でリアス式海岸だったので、船ならあっという間なのですが。もっと遠い子は二山、三山越えて 30 分以上かけて通っていました。逆に微妙に近い子は、一山越えて学校に通っていました。

［自動車］中学高校の六年間、兵庫県三田市から奈良県北葛城郡河合町の学校まで、電車とバスを乗り継ぎ片道約 2 時間をかけて遠距離通学していた。実家から最寄り駅までは 3km の坂道。朝 6 時 40 分の電車に乗っても、現地のバスの混雑

や信号待ちで遅刻するリスクを常に抱えていた。中学３年の冬、「関西のシベリア」とも称される三田市は厳冬で、ある朝、遅刻しそうになり母親の車で送ってもらおうとしたところ、車体が氷結してドアが開かず、フロントガラスの氷を湯や暖房で解かす作業に追われ、結果的に遅刻した。普段は遅刻に厳しい教員は、「三田の極寒」という地域の地理的・気候的特殊性を理解し、笑って許してくれた。

［電車］京都市右京区の嵯峨野高校に通っていました。普段は嵐電を使って西院で乗車し、帷子ノ辻駅で乗り換えて高校の最寄りの常盤駅まで乗車していたのですが、遅刻寸前の時は、乗換駅より手前にある太秦広隆寺駅で降り、約 1km 走ることで、本来の間に合う電車の１本後に乗車してもギリギリ一限に間に合うという一種の「裏技」がありました。その道というのが、太秦映画村の敷地の中を突っ切って通っている裏路地のような砂利道です。寝坊癖のひどい私は毎週２回ほど「裏技」を使っていましたが、何度も使う内に抜け道の中ほどにいつも立っている映画村の守衛さんと顔見知りになりました。遅刻して走るのはしんどかったですが、守衛さんの「頑張れよ」という言葉は朝のささやかな楽しみでした。

［痴漢］ＪＲ総武線で東京の学校に登校していた頃、毎朝のように痴漢に遭っていた。関西の電車の比ではない満員電車だったので、「除ける」とか「押し返す」とか「安全ピンで刺す」などの抵抗は一切できない状況だった。悔しい。

［駅：ビジネス街］兵庫県尼崎市から京都に通学しており、大阪市北区のＪＲ北新地駅から大阪市中央区の京阪淀屋橋駅まで歩いていますが、毎朝、中之島や淀屋橋、北浜周辺の会社に向かうであろうサラリーマンの方々は、戦いに向かう顔をしている人ばかりです。梅田（ＪＲ大阪駅）から行く時は、だるそうな顔をしている方が多いように思います。

［駅：繁華街］大阪市淀川区、十三にある高校に通っていました。十三は飲み屋の多い繁華街。部活等で土曜日の朝に学校に向かうと、金曜日に飲み会をしてそのまま酔い潰れてしまったのであろう人の姿を見ました。

［駅：球場前］僕の高校の最寄駅はバンテリンドームの最寄駅。中日ドラゴンズの試合がある時は、帰りの電車が白と青で埋め尽くされるので、最寄駅から一つ離れた駅まで歩いて、席を確保しました。中日は弱すぎるので、帰りの電車はいつもどんよりしていました。

［地方鉄道］岐阜の関市から、愛知県の江南市にある学校に通っていた。通学は２時間半かかり、始発で行って遅刻することもザラ。ある日、学校の用事の関係で、クラスの女子からラインが来た。「朝、８時前に学校に来てほしい」。なるべく角を立てないように返事をした。「始発に乗っても無理だからごめん！」。しばらくして、返信。「女子の LINE グループで話たんだけど、始発で間に合わない、というのはありえないから、君が嘘ついてるっていう結論になった。だから来てほしい」。極寒の中、始発が出る前に自転車を漕いで通学した。良い思い出だ。

［車窓］神戸市の北の方に実家があり、地下鉄に乗って山を越えた先の高校まで通学していた。私の家の近くは、港の方よりも常に気温が２～３度低く、天気も異なることがある。朝、家を出たときには雪が降っていたのに、学校に着くと全く降っておらず夢だったのかと思うことがあった。逆に、学校を出る際には何もなかったのに、帰りの地下鉄のトンネルを抜けると景色が真っ白になって、川端康成『雪国』みたいだと思ったこともある。

［！］高校生の時はバス通学で、車内は私の高校の学生がほとんで、一般乗客はいませんでした。高２の時、いつも通りバスに乗っていたら、違うクラスの気になる女子が乗ってきました。隣になった時に話しかけてみると、嫌な顔ひとつせず会話してくれました。それが数日続いたので、いい感じになっていたと勝手に思い込んで、バスを降りた後に告白したら、見事に振られました（京都府亀岡市）。